慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	消費経済論
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.11 (1920. 11) ,p.1618(116)- 1630(128)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201101-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

め、及び判決例の缺除するがために、曖昧の裡に葬り去られたのである。

保險制度が實施の効力を有するに至りて後暫くは、保險料を控除する影響と、賃銀を低廉ならしむるその他の原因の影響とは、區別することが出來なかつた。さうして保險を負擔するが故に、賃銀を增加するのを差控たのであるかも知れない。保險制度の利益に對する心理狀態によつて、勞働者が賃銀の增加を得んかためにする奮鬪的努力を、減少せしめることは出來難い。彼等の保險に對する態度は、むしろ保險制度の利益を、その最低生活程度の中に包括せしめんとするにある。從つて彼等は保險制度が存在するを理由として、低廉なる賃銀を甘受することは、到底不可能なことゝするのである。

消費經濟論

奥井復太郎

Charles Gide は其の著 Political Economy（第三版一九一三年）の第三章に於て人間の慾望並びに價値の問題に就て曰く『人間の慾望は凡ての經濟行爲の原動力にして、從て經濟學のあらゆる研究の出發點となるもの也。經濟學の全般はかくて此の章の下に齎らさるゝを得可し』と（p. 35）更に同書第四編の消費論の冒頭に於ては消費の意義を明かにし『其が意義は經濟學上の諸論題中消費に與へられたる狹少の部面の、吾人をして想像せしむる以上に重大なるものあり。消費の領域は無限に富み然も未だその半ばも開發せられず、經濟學が他日新しく出發せんとせば恐らくは此の點よりなる可し。實に論理的に觀て經濟科學は消費の研究より發足せざる可からず。此の書の當初に吾人が慾望並びに最後效用に就き語れる時吾人は既に消費の領域に立ち入りしなり。故に是等に關して語れる諸章は、爾下の所論と併せて之を再讀せざる可からず』と。（p. 693）

根本的に經濟學を改訂し社會生理學 Physiology of Society の名の下に之を改稱せん事を主張するクロポトキンと其の方向を異にするも、將た又無制限なる慾望は限りある生產力によつて抑束せらる可しと說くも、何人も消費に關して上述のジードの言を否定せざる可し。近世價値學說の中樞を占むる限界效用說はその研究實に吾人の主觀的狀態より出發するもの也。かくの如く、消費の經濟現象に於ける地位を重要視し消費の研究に基いて經濟學理を構成せんとする米國の經濟學者 Simon N. Patten の消費論を窺はんとするも決して徒勞には非ざる可し。

Simon N. Patten によれば『經濟上の研究の出發し得る點は人又は自然の二となす。若し吾人が人より發せば根本的前提は人類に於ける主觀的差異なり。更に吾人が自然を以つて出發點となさば自然に於ける客觀的差異はその第一の前提を爲す可し。』（The Theory of Dynamic Economics. 1892）かくて彼は經濟學說の發達を此の兩前提と對峙せしめて『此の經濟（Physiocrats 前後 J. S. Mill に至る間の經濟を指す）の一般的特色は靜的なるにあり。環境は人類の主觀的差異を無視せしむる迄に强き勢力を彼等の上に有し、自然は甚しく鄙吝に又其の餘剩は甚しく僅少にして爲めに社會關係に於ける急激なる根本的變化を望む可からず』。（Ibid. p. 37）此の間に生まれたる經濟思想は他方に物的科學研究の影響を受けて必然に客觀的差異を偏重し社會並びに人類に存する主觀的差異を等閑に附するに至りたるは理の當然とす可し。然れ共それより後獨逸經濟學者によつて導かれたる新しき觀察は物質的環境よりも寧ろ社會的組織に對する經濟の關係を重要視し『彼等は人並びに社會の研究を以て始むるに至り、經濟學の主要なる前提は、かくて人類の經濟的活動並びに消費が彼等の慾望によつて支配せられ各慾望と其の滿足との間に介在する自然の障害によるものに非ざるが故に、其は主觀的となるに至れり』。（Ibid. p. 37）此等の主觀的前提より、主として墺太利經濟學者の努力を經て限界效用說並びに之に基く

價値學說を生むに至りたれど尙は『單なる主觀的經濟は之のみを以て古典的論客の靜的經濟と置換せらるるに非ず蓋し其の前提の多くは客觀的にして且つ外圍に關するものなれば也。價値學說と共に費用の學說も近代的基礎の上に置かれざる可からず』(Ibid. pp. 37-8)『經濟的環境が人類に於ける變異と共に變化するの事實の示さるゝ迄は自然は常に鄙吝なるものとせられたり。人類の各々の新しき階級は異なりたる方法に於て世界を觀察し、彼等が見出す外圍なるものは彼等の精神的特質に倚れり。一社會の客觀的法則は單に自然の法則と云ふ可きに非ずして其は社會が利用する自然力の特殊の結合より抽出せられたる法則なり』。(p. 38)『更に外圍の各種の變異は彼等の消費を經て人類に反動するもの也。費用の低減は人をして彼等の消費する貨物の順位を變化せしむ。かくて新しき生活の標準のなるや人類の感情又は精神的特性は之れに依つて變化せらるるに至る。

『斯の如き方法に於て各勢力は各々補足して作用するに至り此の關係を經て社會の進歩は繼續す。社會心理學 Race Psychology 即ち社會によつて人々の中に生じたる主觀的性質慾望及び感情に於ける變化は彼等に新しき經濟的環境を與へ、此等新しき外圍は消費に於ける變化を經て生活の標準を變更しかくて新しき標準は社會心理の上に影響して新しき生產の動因を發生せしむ。斯の如き完全なる經濟を稱して余は之れを動的經濟 Dynamic Economy と云ふ蓋し其は主觀的及び客觀的世界の間に存する相互作用によつて社會に於ける進歩的運行の連續を保つが爲めなり。進歩は自然の頑牢なる障害に對して無益に其力を費す波浪の連續たるを止め均衡を見出さざる不斷の前進的運動となるなり。』(Ibid p. 38)斯の如き主觀的前提ならびに客觀的前提を併立せしむる思想は又彼が The Reconstruction of Economic Theory (1912) の一書に於て明かに表明せられたり。同書の The Development of American Thought の一章に自己の態度に就て曰く『……ジェームス教授は二個の言葉を亞米利加に於ける共同財產となせり、即一は "pragmatic" にして他は "pluralism" なり。彼は此等は何れも新しき思想に非ずしてただ思索の舊來の方法に對する新しき名稱なりとせり。思索家は一方に於ては常に合理論的なるか將た又實際主義論的なるか他方に於ては一元論的なるか或は又多元論的なるかなり』。かくて Patten は自己並びに同じく經濟學者なる P. Clark の研究に於て此の兩種の差異を認めクラーク教授を以て經濟的一元論者なりとなすと共に或種の根本的對立を主張し其の間に何等主從的關係を認めざる彼自からを以て經濟的多元論者とせり。『余が思索の方法に於ては靜態及び動態は均しく根本的事實にして共に兩者の一より抽出し得可きものに非ず。從て吾人は經濟的論議に於ては靜的原理と動的原理とを明確に區別し一より推論せられたる法則は他より得られたる法則に反對するものなるを豫期す可きなり』。更に此の二元論の實證として保護政策並びに自由貿易につき云へる後『之れと等しく消費の法則は人の性質の法則にして、從て人類の感情又は體慾より抽出せらる可きに反して、生產の法則は吾人の生活する物質的世界の法則也。故に共に經濟學者の注意す可き事實を無視する事なくして消費を生產の下位に立たしむるを得ざると共に生產をして消費に隸屬せしむるを得ず。更に一般的形式を以て此の二元論を示さば經濟學の一部は物質的自然に基礎を有し、茲より人類の行動

によつて覆へすを得ざる普遍的適用の法則を得。之に反して多くの經濟的法則は人類の性質の表現なり。是等は單に修正の可能なるのみならず恒に變化しつゝあるものなり。故に經濟學の一の要素が恒久的なるに對して他の要素は一時的なり。勿論之れに依て吾人は人類の資質が容易に變じ得可しとするものにあらざれ共吾人が人類と認むる所の特徴は進化的變異に左右せらるゝ點にあり』。(Ibid pp. 4-5) 吾人は次で經濟學研究の主觀的要素たる消費について Patten の所論を明かにせんと欲す。

II

S. N. Patten は前掲の The Theory of Dynamic Economics の第八節に於て財の消費が貨物の價値に及ぼす影響を考察せり、先づ經濟學上に於ける消費の意義に關して曰く『Mill は消費の法則は單に人類の享樂の法則なるが故に其は經濟學の一部分たるものに非ずと主張し、Jevons は之に對して經濟學の研究が人類の享樂の法則の上に據るは明なるが故に且つ他の科學にして此等の法則を啓發するものなければ此等は經濟學者によつて研究せられざる可からずと云へり』。之れに對して Patten は『兩者は共に消費の法則が純然たる主觀的事實に基くものにして內的觀察又は一般的經驗より簡單に歸納する事によつて決定せられ得可きものとなせり。斯の如き見解を以てせば Mill が經濟的論議より消費を除外し、又 Jevons が彼の經濟學の理論を甚しく散漫なる消費理論の上に基礎を求めたる、共に異常とす可きに非ず』。と (Ibid. p. 39) 實に墺太利學派によつて明かにせられたる價値學說は純然たる主觀的事實に基き其の研究は既に各貨物の效用が一定數量に於て存する事を容認せるの上に發展するものなれ共消費の法則はその基礎を一部は主觀的事實に一部は客觀的關係に有し其の研究は此等の財貨の效用の原因並びにその變化の狀態を探究するにあり。

而して Patten は其の效用の性質について三種類を區別し、單なる生存の滿足を唱へて絕對的效用 (absolute utilities) とし、直接生命に關せず寧ろ生命の內容に關するものを積極的效用 (Positive Utilities) となし其は單なる生存に補加せられ得可き滿足の綜量を指し、第三は生命の享樂を減少せしむる苦痛を與ふる消極的又は否定的效用 (Negative Utilities) 也。然も彼は三種の效用の關係については生命の必須物件は最高の效用を有し奢侈品は寧ろ最少の效用を有すとなす所說に反對して上記の第二種の效用即積極的效用を以て吾人の研究の對象とす可しとせり。曰く『何れの生活も生命の絕對的效用に或程度の積極的效用又は快樂を附加し、此の總額より或種の否定的效用又は苦痛を除去す可きものを包含す。而して消費の學說は決して絕對的效用に關するものに非ず。蓋し是等の效用は之れを增加し又は減少し或は比較するを得可からざれば也。空氣は絕對的效用を有すと雖も其は殆ど或は全く積極的效用を與へず。又食物は絕對的效用を有すると共に普通積極的效用をも併有す。食物は生命の享樂に附與する所あるに對して空氣は僅かに生命を維持するのみ。貨物の各配合に對して吾人が撰擇をなし得る場合には是等の貨物の配合は何れも生命のあらゆる必須を包含せざる可からず。斯の如き性質を有する貨物の配合は之れによつて吾人が享樂の最大量を得可き配合を撰擇するによつてその比較をなすもの也。故に生命の絕對的效用或は必須を包含する其等の配合が吾人に最大量の快樂を與ふるものなりとするは正しからず。‥‥生命に必須なる

一貨物は之れに對する代替物なき間は絶對的效用の性質を有す可し、然れ共生産力の增加が同一の慾望を滿足せしむ可き他の貨物との間に撰擇を許容するに至りては兩者は彼等の與ふる快樂によつて計量せらるゝ效用を有するに至る。然らば彼等の價値は其の最後の增加量の積極的效用に合せんとす。吾人が言葉に制限を附する事なくして用ふる時は吾人は效用なる言葉を以て積極的效用の意味に使用するものなり』(Ibid. pp. 39-40)（此の最後の點に關しては Edwin R. A. Seligman の Principles of Econonics, 1916 の一八五頁 Value and Marginal Increments of Wealth の一節「クラークの法則」を參照す可し）。

次で Patten は消費の理論の概要を述べ其の第一、必需性の法則　生命は貴重にして吾人は其を保持せんが爲めに他の目的を犧牲に供するを甘んずるものなり。一個人の消費する所となる財貨の總ての配合は何れも生命を支持し現在の肉體的必要を充すに要せらるる要素を含有す可し。∴如何に大なる快樂の總量が犧牲となるも此等の絶對的效用は獲得せられざる可からず。かくて原始的社會に於て大多數の人類が蒙りたる不幸と貧窮とは何れも此の必需性の法則の結果にして蓋し其は彼等をして殆ど積極的享樂を得るを得ざるが如き消費狀態に在らしめしが故也。

第二、多樣性の法則　一貨物の連續的消費は結局飽滿の域に至る迄其の增加量の效用を漸減す。此の現象は慾望の變化複雜によつて阻止せらる可く一貨物より他の貨物への轉移は消費の滿足の遞減を止め且つ之れを增進す。かくて消費貨物の數の增加は各貨物の限界效用の增加を伴ふものなり。

第三、調和の法則　一貨物の效用は之れと共に消費せらるゝ貨物の配合に賴るものなり。かゝる財の消費が全體と調和する時は是等の消費に伴ふ效用の總量は個別的に消費せられたる時の總量に比して遙かに大なるものあり。從て各貨物の配合がよく調和を得るに於てはその總效用の量は個々の效用の總額よりも大なる可く、若し反對に一致せざる時は其の減少を見る可し。かくて人は其の消費物件の撰擇に於て其等の間の調和を重んじ不調和の要素は之を消費より除去するに努むるなり。

第四、費用の法則　若し人類が勞力を費す事なくして彼等の慾望を滿足し得たらんには彼等の消費の配列は現在の其れと大いに異なる所ある可し。效用を凌く費用を要する貨物は各人の消費に遠ざかれるものなり。消費物件はその總效用に依て評價せらるゝに非ずして費用に對する效用の餘剩によつて尊敬せらるゝ也。

第五、配合の法則 (laws of Grouping) 社會に於ける人類の生活は原始的消費に於て大なる享樂を得可き貨物僅少にして消費者は此等の享樂物件を出來得る限り多く其の消費に齎らさんとするが故に他の貨物の消費は之れを前者に依て獲られざる絶對的效用を給するに必要なる程度に制限す可し。而して此等の主要なる快樂が常に相一致せざる時は各人は是等の消費物件中より主として調和し得るものを撰擇し是等を他の僅少なる積極的效用と共に大なる絶對的效用を有する貨物と配合せんとす。

第六、否定的效用の法則　或種の絶對的效用は同時に否定的又は消極的效用を有す。醫藥の如きは絶對的效用を有すると共に其の不快なる味感は積極的幸福の總量を減ずるが故に否定的效

用を有するものなり。等しく又現在快樂を與へ又は少なくとも苦痛を與へざる多くの貨物も後に於て苦痛の源となる事あり。斯の如くして否定的效用は多くの人の積極的效用の總量を減ずる事によつて彼等の消費の配列を亂すに至る。(cf. Ibid. pp. 41-43)

『是等の消費の法則の複雜なる影響は原始的狀態より推移する社會の進步の方向を、財がその與ふる快樂に依て取捨せらるゝの自然的狀態の下にある場合の方向と、異ならしむるに至る。原始的人類が自然的なりと云ふ事は往々唱へらるゝ所なれ共も然も吾人が彼等の外況を、緻密に觀察する時は彼等の行動は最も不自然なるものなるを知り得可へし。彼等は絕對的效用の生產が彼等の注意を要求するが故に、その經濟的外圍について强き快樂を滿足せしむるを得ず。多くの貨物に要する大なる費用はその消費の種類を減少し、彼等をして否定的效用を有する貨物を加ふるを餘儀なくせしむ。彼等の消費せざる可からざる少數の貨物は然も相互に調和を缺き斯くて是等に依て得る享樂の總量は甚しく減せらるゝに至る可し』。(Ibid. pp. 43-44) 是れに依て是れは生產力の僅少は其の社會の物質的享樂を阻害し、消費撰擇の自由を望む能はざる可し。即ち生產力に增加は消費の方面より觀ても社會を此の不幸より救ふものなり。『原始的社會は斯の如くして其の積極的效用の總量が零の夥多によりて僅少なる狀況の下に組織せらるゝものなり。故に其の進步は大なる快樂より小なる快樂に移るに非ずして正さに之れと相反する方向に動く。生產力の增加は既に消費せらるゝ貨物の數量を增加するに非ずして消費の種類を複雜にす可きに用ひらる。否定的效用を有する貨物は除かれ消費全體と調和せざる財は排せられ、幸福の總量を減ぜずして寧ろ之れを增加せしむ可き他の財の之れに代るに至る。社會の進步は既に使用せらるゝ貨物の消費を增加するに非ずして他の消費と調和せざる財に換へて大なる幸福の總量を有する新しき財を用ふるにあり。かくて消費せらるゝ貨物は其の性質種類に於て變化し單なる數量の增加に非らざるが故に其の進步は靜的變化に非ずして動的進步と云ふ可し。故に社會進步の第一義の法則は社會は單純にして生產の勞力夥しき且つ不調和なる消費より複雜にして勞力の少量なる調和的消費に移つて進步すと云ふ一事なり』。(Ibid. p. 44) 消費と社會進步の關係にして斯の如しとせば社會の進步は單なる生產力增加の一事に依るものにあらず、即ち之れに伴ふ消費の變化に倚る可き事明らかなる可し。Patten は限界效用の價値說に對して曰く『價値は限界的效用に據るとする理論は二個の假定の上に基けり。即ち吾人は最初に吾人の最も强き慾望を滿足すべく、次に一貨物の加增的增加量は最初の加量に比して漸減せる快樂を消費者に與ふるものなりとする二なり。然れ共此等の前提は嚴密なる意味に於ては消費が靜的なる場合にのみ眞なり。一社會の外況を變化し又は其の社會の生產力を增加せしめなば最初の社會的狀態に於て滿足せられたる慾求以上の强き慾望を充し得可き財を消費者に齎すを得可し。

『吾人は先づ最も强き慾望を充足するものなりと云ふ事及び生產力の增加は吾人に同種類同性質の財の夥多を致し、或は又消費に於て、より少なき享樂を與ふる他の財を授くるものなりとは往々唱へらるゝ所なり。是等の前提よりして、消費貨物の加增的數量は最初の增加量よりも少なき享樂の源となり且つ從て各貨物の效用

の最後の含量は生産力の增進に因る財の數量の增加と共に漸次減少すと論ずるを得可し。然れ共此の結論は絶對的效用と積極的效用とを混同せる事によつて無效と云ふ可きなり。絶對的積極的效用の兩者に就いて撰擇す可しとせば前者が撰擇せらる可し、社會より孤立せる個人は往々かゝる撰擇をなすと雖も孤立的個人の行爲を採りて常規の社會的關係の下にある個人の行動を判斷するの標準となすは一個の誤なり。

『原始的社會に於ては生産力の缺乏に因て人は絶對的效用を撰ぶを迫られ其の大部分は殆ど僅かの享樂を與ふ、然も彼等が快樂を受け得可き小數の財に就ては既に數多の數量の消費せられ爲めに更に其の增加あるも之れによつて得可き快樂は甚だ僅少なるか或は殆ど存在せざるに至る其の結果原始的社會に於ては消費貨物の限界的加量の有する積極的效用は非常に低く或は殆ど無に及ぶ。……』(Ibid. pp. 44-45)

三

茲に於て消費の社會的關係並びに其の社會進歩に對する意義は明かなる可し。『社會的進歩による消費の種類の增加は社會をして其の勞働を僅少なる快樂を與ふる絶對的效用より轉じて生命を持續すると共に消費に大なる享樂を與ふる新しき效用を生産するに至らしむ。同時に消費全體と調和せざる貨物は拒否せられ、否定的效用は積極的享樂を與ふる財によつて變換せらる可し。自然力の利用の改良並に其の經濟的運用に因る生産力の增加は消費に於ける此等の變化と相俟ちて作用す、生産力の利用は消費を支配する動因によつて指導せられ生産力の增加に伴ふて生ずる餘剩の時間は零を越ゆる事多からざる限界的效用を有し且つ現に消費せらるゝ財の數量を增加せしむるに利用せられずして高き限界的效用を有する新しき財の生産に利用せらる。』(Ibid. pp. 45-46)

『新らたなる財が名稱に於て既に使用せらるゝものと同一なる現象は屢〻生ずと雖も新しき財にして從來の財の充足し來りたる慾望に補足して他の新しき慾望を滿足せしむる時は其の限界的效用は上進す可し。粗雜なる一足の靴は其の所有者をして裸足の苦痛を免れしむ。格恰にして美麗なる一足の靴は此等の苦痛を除くと共に積極的快樂の源たる可し。第一の上衣が其の仕立及び色合に就て不滿の源となる時は、第二の上衣は之れより大なる限界的效用を有す可し。一着の事務服と夜會服の一襲は共に其の所有者を防護すと雖も後者は屢〻大なる限界的效用を有するが故に衣服の限界的效用は一種の衣服を有する者よりも兩者を有する者に對して高かる可し』。(Ibid. p. 45)

『更に Patten は個々の財の增加に伴ふ其の財の消費に就きての滿足と消費全體として即ち此等個々の消費を總括して之に加へられたる一個の消費の增加量の與ふる滿足との關係を明かにし、『各貨物の限界的加量は消費の限界的加量と相等しき效用を有す。』とせり。かくて『消費の種類の增加に因る正規の影響は從來の生産に於ける限界的勞働者をして强き慾望を充し得可き新しき生産に轉ぜしめ、かくの如き變化と共に消費の限界的加量の有する效用は以前よりも大となる可し』。(cf. ibid. pp. 46-47)

『生産に於けると等しく消費に於ても一つの限界あり。最も貧弱なる生産力を有する土地が使用せられざるが如くに最も弱き慾望は充足せられずに止む。而して消費の限界的加量が强き慾望を充す場合には消費の限界高しと云ふ可く、かくて消費の種類を增加するものは消費の限界

を上進し、反對にその種類を增加せしむる事なくして單に財の數量を增加するものは其の限界を低下す可し』。(p. 47)

四

かくて Patten は財の消費に基づく主觀的價値の理論の構成に入れるが吾人は此の一篇に於ては社會の經濟的進歩に於ける消費の意義を明かにするに止め、そが價値に對する關係並びに經濟學上の客觀的要素分配等の問題に就ては言及せざる可く僅かに次の一論を以て此の稿を終らんとす。

『動的社會に於ては消費の限界的加量の價値の上騰するによつて主觀的價値は上進するの傾向あり。社會の發達に於ける各連續的時代は貨物の總價値をして漸次その總效用に近からしめんとす。たゞ此の法則の意義を充分に評價せんには其の見地が消費者の立場なる事を念頭に置かざる可からず。消費者の價値は家屋衣服食糧並びに各種の完成品に關す。其は消費の單位の價値にして消費者が享樂を求め得る補充的貨物の集團の價値なり。費用(cost)は價値を決定すと信ずるに依て古典的經濟學者は當然に其の價値研究を生產者より發せり。然れ其價値を以て消費者の主觀的狀態に依らしむるを以て矛盾なしとする者は消費者より始めざる可からず』。(Patten, The Theory of Dynamic Economics, p. 49.)

附記　此の一篇は Simon N. Patten の上記の著者中第七、第八節の抄譯なり。第七節は The Dynamic Economy. 第八節は The Influence of the Consumption of Wealth on the Value of Commodities と題せり。彼の消費に關する著書には Consumption of Wealth (1889) 經濟學の前提に關しては The Premises of Political Economy 學說に關しては Malthus and Ricardo. The Development of English Thought. (1904) 及び Reconstruction of Economic Theory (1912) 等其他尙數著あり。(九、一〇、一四)

歐米經濟史界の趨勢と其の研究法（下）

木村莊五

五、諸發達の綜合の必要

更に惟ふに特殊なる研究を繼續しつゝも亦吾人は綜合に對して一層の注意を向け、孤立せる研鑽の若干を綜合し將來の研究を指導するを得べきである。正に吾人のある者は既に經濟史に對し嫌焉たらざるものがある。蓋し斯學が當時の流行を手寫するが如く此の境域彼の境域と轉々し、例へば現在に於ては資本と勞働に傾きて全般の理解に必要なる既に認識せられた密接な關係を有する他の重要なる部面を閑却せるが如き事之である。私は所詮斯學の最上の興味は次ぎの二者の平衡を求むるにある事を信ずる、即ち(一)現在の差迫つた問題を歷史的見地から研究する事及び(二)斯學の趣旨を完成するに必要なる彼の閑却せられたる方面の研究が之れである。蓋し綜合的研究に對する欲求は常に分析的研究に對する需求と交替する。

吾人はこの振子の振動が第十八世紀の初めから第十九世紀末に至る各時代に起つたのを見る事が出來る、其の最近の振動は舊歷史派經濟學者の燥急な綜合に對する反動としての特殊研究に對するものであつて、この傾向はシュモーラーの流派の周圍に結晶した。

斯學の現狀に於ての主要なる綜合は一箇の中心主題を以て爲されなければならない。其處で問題は此の主題、他のすべての問題が其の周圍に廻轉する處の主題を發見するにある。此の主題が何であるかに關して殆ど意見の一致がな